

「土砂災害から命を守るために」

岐阜県 山県市立伊自良中学校 3年 安藤 麻由

私が自然災害について考えるきっかけになったのは、高校見学会で液状化現象の映像を見た時からだ。硬いアスファルトが、フニャフニャと波を打つように見えた。液状化現象とは、地震が発生して地盤が強い衝撃を受けると今まで支え合っていた砂粒同士がバラバラになり、地盤全体がドロドロの液のような状態になる現象だ。液状化現象が発生すると地盤から泥水が噴き出したり、建物が沈下したり、地中に埋まっていたマンホールなどが浮き上がる。建物や道路なども被害を受けるため、ライフライン施設に大きな影響をおよぼすのだ。今まで自然災害と聞くと、恐怖を感じるだけだったが、将来発生するかもしれない被害を防止するためにも、災害で起こる様々な現象を知ることが大切だと思った。

先日、滝のような雨が降り、土砂災害警報が出た市もあった。外を見ていると、一瞬で大きな水溜まりができた。このまま雨が降り続き、家の横にある用水路があふれ道路が冠水しないか心配だった。

翌日のニュースで、大雨の状況を知った。橋の一部が崩れ落ちたり、学校の敷地や道路まで土砂が流れこんだりした地区もあった。なぎ倒された木が学校のそばまで押し寄せ、自然災害の恐ろしさを感じた。そこで私は、一瞬で人の命や財産を奪う、土砂災害について調べてみることにした。

日本の国土は、75%が山地や丘陵地で傾斜の急な地形が多い。そのため、台風や集中豪雨で水と土砂が猛スピードで一緒に流れる土石流や山ごと地面がすべり落ちる地滑り、崖崩れなどの土砂災害が発生する危険がある。土砂災害の平均年間発生件数は、1千件を超え、ほとんどの都道府県で発生している。日本全国の約68万もの区域が土砂災害のおそれがあることを知り、衝撃を受けた。私の住んでいる伊自良地域はどうだろうかと思い、ハザードマップを調べてみた。すると、私の通う中学校の裏は、土砂災害特別警戒区域になっていた。そして、親戚の家は土砂災害警戒区域にあることがわかった。同じ区域内には他にも十数件の住宅があり、それに加え高齢化が進んでいるため心配だ。親戚も高齢夫婦で身体が不自由なので、避難に時間がかかるだろう。警報が出た時には、早めに避難するように声を掛けるようにしたいと思った。

私たちは、身を守るために住んでいる場所が土砂災害警戒区域ではないかの確認、市町村が出している土砂災害ハザードマップを利用し、避難場所や避難経路の確認をする必要がある。そして、避難指示が出ていなくても、崖や地面にひび割れができる、小石が落ちる、崖や斜面から水が湧き出る、地鳴りや山鳴り、樹木が傾くなどの前兆現象があれば、すぐに避難しなければならない。また、自治体の防災訓練や避難訓練に積極的に参加するよう促すことが重要であると考えられる。訓練は、避難場所や避難経路の確認だけではない。いざという時に近所や地域の人たちと助け合うための関係をつくる良い機会であるからだ。

幼い頃、高速道路を走る車の窓から景色を眺めていると、山の斜面に見かけた格子状の壁がワッフルに見えた。急な斜面やクネクネした斜面に次々に現れるワッフルを姉たちと数えていた記憶がある。ワッフルは「法面保護工」と呼ばれていることを知った。「法面保護工」は、植生を用いる「植生工」とコンクリートや石材を用いる「構造物工」の大きく2種類に分けられ、その場所にあった工法が選定される。何気なく見ていた工事や構造物が私たちの暮らしの安全を守っているということをワッフルが私に気付かせてくれた。

日本は、アジアモンスーン気候地域に属している。アジアモンスーン気候は豊富な水をもたらし、恩恵を与える一方で、大雨による被害も発生させる。実際に、日本全国にあるアメダス観測点のデータによると、年間の大雨発生回数が年々増加傾向にあり、今後さらに気候変動による大雨が増えると予想されている。土砂災害と聞くと山間部で発生しているイメージがあるが、ここ数年は都市型斜面災害と呼ばれる土砂災害が増加しているそうだ。特に都市部にはインフラやラ

令和4年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞(事務次官賞)

イフラインなどの重要な施設が集中しているため災害が起こると被害は大きくなる。だからこそ、技術が発展しハード対策、ソフト対策が進んでほしい。

今の私にできることは限られている。だが、これから一層知識を身に付け、災害に備え、いざという時に最適な選択ができるようにしたい。土砂災害から命を守るために。